

## 研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」に  
ついての海外における諸研究（12）

——1970年代（その1：A. S. スキナー）——

中 川 栄 治

## 序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、さらに、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みをなした。本稿はそのつづきであり、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究のうちの一部、ペリカン・クラシックス・シリーズの一つに含まれているアダム・スミスの『国富論』（第1—第3篇）への編者の「序文」中における「アダム・スミスの価値尺度論」に関する編者A. S. スキナーの所論の内容を整理しようとするものである。

A. S. スキナー (1970)<sup>(1)</sup>

スキナーは、彼が編集したペリカン版『国富論』への序文においてスミスの価値・価格分析に言及するさいそのスミスの議論を、『国富論』第1篇第5、第6章に主要な部分が示されているものとしての価値理論に関する議論と、第6、第7章に主要な部分が示されているものとしての価格とその決定因に関する議論からなるものとして把握し、そのようなものとしてのスミスの議論についての彼の理解を示しているのであるが<sup>(2)</sup>、そこにはつぎのような見解、見方が含まれている。

〔I〕価値理論 (value theory) に関するスミスの議論は、異なるものではあるが関連のある二つの問題を取り扱う。第一の問題は、一財貨あるいは一財貨の数単位が他の財貨と交換されるその比率を決定する諸力に関するものである<sup>(3)</sup>。ところで、この第一の問題は、個人が交換をつうじて他商品の特定単位を獲得するために一商品の数単位を手放そうと思うその比率を決定するであろう諸要素についてのものなのであるが、スミスは、そのような交換価値の問題それ自体を目的として論じたのではなく、彼は交換価値の問題を、個人が生産したその個人が交換において用いようとするところの諸財貨の総ストックの価値を左右する諸要因を明らかにする手段として、論じたように思われる。このような事情から、価値理論に関するスミスの議論で取り扱われる第二の問題は、基本的には、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値をわれわれがそれによって測定することができた他人との交換において使用されるところの手段、ということに関するものであった<sup>(4)</sup>。

〔II〕この第二の問題についてのスミスの議論、すなわち、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との〔諸財貨の〕交換において使用される手段に関するスミスの議論は、つぎのようなものである。

(II-1) うえでみたような方向で交換価値の問題を考察するスミスは、

諸財貨のあいだの交換比率の決定因についての議論にくわえて、つぎのような考えを示している。すなわち、スミスは、個人が処分しなければならぬ諸財貨（事実上、彼の所得）の<sup>●●●</sup>実質価値は、彼が支配しうる、またすべての（個々の）交換がいったん行われた後に彼が現に受け取る、（労働単位のタームで示された）諸財貨の量によって、<sup>●●●</sup>測定されなければならない、とするのである。<sup>(5)</sup>

（Ⅱ-2）スミスのこの結論は、彼の言っている原始的な物々交換<sup>(6)</sup>経済におけるケースを考えることによってはっきりさせることができる。すなわち、そこでは、個人はただ一つの種類の（完成）生産物を生産しそしてその生産物が彼の私的な（処分可能な）財産となる、ということが仮定されている。そして、いまでも、スミスが言ったように、〔このような経済においては〕諸財貨のあいだの交換<sup>●●●</sup>比率がそれらの財貨に体化された労働の割合につねに等しいならば、そのときには、諸財貨の<sup>●●●</sup>総ストックの交換価値は、その総ストックを生産するのに要した労働に等しいにちがいないということになる。換言すれば、個人が生産した諸財貨のストックに体化された労働は、〔その諸財貨のストックと交換に〕受け取られる諸財貨——すなわち、その個人が生産した諸財貨のストックによってその所有者であるその個人が購買または支配できる量の諸財貨——のなかに体化されている労働に等しいにちがいないのである。そうだとすると、以上の議論が二つの重要な要点をもっているということが、明らかになるであろう。第一に、スミスはつぎのことを言っているのである。すなわち、物々交換<sup>●●●</sup>経済においては、個人が費やし（expend）そして<sup>●●●</sup>その個人の生産する財貨のなかに体化される労働は、等量〔の労働〕と交換される、あるいは、等量〔の労働〕を支配するにちがいない、ということである。要するに、このような状態のもとにおいては、体化された労働（labour embodied）は支配される労働（labour commanded）に等しいのである。ただしそのさいの基本的な前提は<sup>●●●</sup>すべての財貨はある所与の（うえて明示された）比率で交換されるということおよび労働が唯一の生産要素であるということなので

あるが。第二に、スミスはつぎのことを言っているのである。すなわち、個人が自分の生産物を他人の生産物と交換することによって自分の必要を満たすことができるその程度は、その個人が交換において受け取る（労働単位ではかった）他人の産出の量によって確定されなければならない、ということである。明らかに、これは、諸個人の経済的厚生（諸財貨に対する支配力）を測定する一つの方法であり、しかも、厚生を<sup>(7)</sup>実質タームで測定することの必要性を指し示すものである。

（Ⅱ-3）ところで、スミスが注目したように、物々交換経済と近代の経済とのあいだのひとつの明白な相違は、前者においては諸財貨と諸財貨とが交換されるのに対し、近代の経済においては諸財貨はまずある額の貨幣と交換され、そしてその後に、この貨幣が他の諸財貨を購買するために費やされるという事実のなかに、見いだされる。スミスが考えていたように、そのような近代の経済という状況のもとにおいては個人は、（労働という「労苦」に耐える見返りとして受け取られた）彼の収入の価値を、ごく自然に、彼の収入を支出することによって彼が獲得しうる諸財貨の量というタームでよりもむしろ貨幣のタームで評価する。だがこれに対し、スミスは、厚生（すなわち、自分の欲望を満たしうる自分の能力）の真の尺度は、貨幣よりもむしろ「貨幣の値うち」のなかに見いだされるべきである、ということを中心して主張しようとしたのであり、そしてその場合その「貨幣の値うち」は、個人やグループが購買しうる生産物の量（「支配される」労働）によって<sup>(8)</sup>確定されるのである。<sup>(9)</sup>

（Ⅱ-4）このような論拠に基づいて、スミスはさらに進んで、所得の名目価値と実質価値とを区別し、そして、もし近代における（貨幣）収入の三つの「本源的な源泉」が賃金、地代および利潤であるとすれば、そのばあいそれらの各々の実質価値は、究極的には、「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって」(W. N., p. 50. 大河内訳〈Ⅰ〉, 85ページ。)測定されなければならない、ということを中心としたのであった。<sup>(10)</sup>

（Ⅱ-5）実質所得と貨幣所得との区別を確立するとともに、スミスは

さらにまた、いかなる一時点においてもまた異時点間においても所得の実質価値を確定しうるような唯一の安定的な基礎として、労働単位を擁護しようとしたのであり、かくしてスミスは、価値の絶対的尺度の（たぶん無駄な）追求——リカードウやマルクスによってうけつがれることとなった研究——を、開始したのであった。<sup>(11)</sup>

（II-6）なお、そのようなものとしての労働単位に関するスミスの議論の要点はつぎのようにまとめることができる。すなわち、①もしわれわれが異時点間の実質所得水準を比較しようとするならば、ある安定的な測定単位がいれば価値係数を用いる必要があるということは明らかことなのであるが、スミスの見解では、労働単位のみが安定的であったのであり、そしてその理由は、労働の不効用は通時的に不変であると言えるということであった。このことからしてわれわれは、スミスの労働単位とは不効用の観点から述べられているものであって、（直接的に）人・時（man-hours、延べ労働時間）の観点から述べられているものではない、ということに気づく。②単位のその選択は、〔事実上〕賃金単位の諸問題を〔扱うスミスの議論を〕考察することによってさらにはっきりさせられる。なお、そこでは、〔事実上、〕賃金単位は、1労働単位当りに支払うべき報酬すなわち個人をして労働に伴う不効用を忍ばせるために（「自分の安楽と幸福とを放棄」させるために）必要な報酬として、示される。この角度からながめて、スミスは、貨幣タームで表された賃金単位を、短期については適当であるが、長期については、貨幣はその本位貨の貶質によってであれアメリカの鉦山の発見のような諸発見の結果によってであれその価値が変化しやすいという理由から、適当でないと考えた。他方、スミスは、長期については賃金財（穀物）のタームで表された賃金単位を適当とみなしたが、短期については適当でない、と考えた。短期についてそのように考えた理由は、短期（数年間）の場合には労働者の実質賃金は経済成長率とともに変化しがちである、ということであった。それにたいし、長期では賃金は生存費水準に向かう傾向があると思われたがゆえに、長期

の場合には、関連財（穀物）単位が適当であると考えられたのであった。したがって、スミスは、貨幣単位あるいは穀物単位の有用性を否定したのではなく、彼は、労働はつねに、（こうむる不効用という点からみて）<sup>●</sup>その価値が安定しているがゆえに、労働単位が比較の基礎となりうる唯一の普遍的で不変な標準<sup>スタンダード</sup>であるということをこそ、主張していたのである。

③他方スミスは、労働の不効用はあらゆる仕事に従事するあらゆる個人にとって同一であるというわけではなく、諸仕事のあいだには、その快適さあるいは不快さ等々の点で質的な相違があるということを、認めていた。そうであるとする、1時間の「激しい」労働に伴う不効用を、普通の労働力の単位数で表すことが必要になる。スミスの議論によれば、その適切な割合は、市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差によって十分に表現されるということになるのであった。<sup>(12)</sup>

### （注）

- (1) 本稿では Andrew S. Skinner, 'Introduction' to *The Wealth of Nations: Books I-III*, by Adam Smith, ed. Andrew S. Skinner, Pelican Classics, reprinted with revisions (Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books, 1974—published in Pelican Books 1970, reprinted 1973, Introduction copyright © Andrew S. Skinner, 1970, 1974—)(川島信義, 小柳公洋, 関源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』(未来社, 1977年))のなかで示されているスキナーの所論をみる。なお、本稿で使用した上掲「序文」そのものは1974年のものであるが、その発表年度の区分については、本稿にさきだつ諸稿におけるのと同様の原則に従って、その最初の著作権が成立した年度、1970年を記しておいた。そして、以下では、上掲「序文」を、Skinner[1970]と略記することとする。
- (2) Skinner[1970], pp. 47-58. 邦訳, 100-129ページ。
- (3) この第一の問題に関するスミスの議論についてのスキナーの理解については、Skinner[1970], pp. 47-49, 邦訳, 101-105ページを見よ。
- (4) Skinner[1970], pp. 47, 49. 邦訳, 100-101ページ, 104-105ページ。なお、スキナーによれば、スミスは異なるものではあるが関連のあるこれら二つの問題を取り扱うさいに「交換価値」('exchangeable value') というただ一個の用語しか用いていないのであり、そしてこのことが、第1篇におけるスミスの議論が幾分あいまいなままになっていることの大きな理由である、とされる。Skin-

ner[1970], p. 47. 邦訳, 100ページ。

- (5) Skinner[1970], pp. 49-50. 邦訳, 105-106ページ。なお、スミスがこのような考えを示しているものとして、スキナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようと思わず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited... by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library(New York: Random House, 1937)——以下、*W. N.* と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年——以下、大河内訳と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——, 〈I〉, 52ページ。)(個人にとっての)一つの財貨の価値は、「それによって彼が購買または支配しうる他の人々の労働の量, またはこれと同じことであるが, 他の人々の労働の生産物の量」に, つねに比例しているにちががなく, 「あらゆる物の交換価値は, つねに, こうした力の大きさに正確に等しいにちがいない。」(*W. N.*, p.31. 大河内訳〈I〉, 54ページ。傍点の付されているところはスキナーがイタリック体にしてある箇所。) Skinner[1970], p. 49. 邦訳, 105-106ページ。

これらの文章は、スミスが、個人の保有する諸財貨〔のストック〕の実質価値、個人の所得の実質価値はその諸財貨〔のストック〕、その所得によって支配しうる諸財貨の量、ただし労働単位のタームで示された諸財貨の量〔結局、支配しうる労働単位数〕によって測定されなければならないと考えていた、ということを示している、とスキナーはみるのである。

なお、いうまでもなく、異時点間の比較を考える場合には、「支配しうる諸財貨の量」の異時点間での増減と「支配しうる、労働単位のタームで示された諸財貨の量〔支配しうる労働単位数〕」の異時点間での増減とは必ずしも同一歩調をとるとはかぎらない、すなわち、後者の増減は必ずしも前者の増減をそのまま反映しているとはかぎらない。そのためには、それらの時点をつうじて、諸財貨の労働に対する購買力が一定、逆にいえば実質賃金が一定でなければならず、そうでない場合には、それら二つの量は必ずしも同一方向にさえ動きはしない。

- (6) なお、スキナーによれば、この物々交換経済とは、分析を簡単化するためにスミスが用いた、歴史上のそれとは別のものとしての分析的装置であった、とされる。 Skinner[1970], p. 47. 邦訳, 100ページ。
- (7) Skinner[1970], p. 50. 邦訳, 106-107ページ。なお、スキナーは、いまみた二

つの点に関連して、いままた第一の帰結についてのスミスの所説が、第二の帰結の意味を彼が明らかにする助けになった、ということ、そしてまた、スミスは、前者は限定された妥当性を、後者は普遍的な妥当性をもつものと考えた、ということこの2点を、注目するに足るものとして指摘している。そしてスキナーはさらに、後の方の点に関してつぎのような説明をくわえている。すなわち、そもそも、近代の経済においては労働はもはや唯一の生産要素ではなく、「こうした事態のもとでは、労働の全生産物はつねに労働者に属するとはかぎらない」(W. N., p. 49. 大河内訳くI), 84ページ。), ということは明らかである。もちろんこのことは、諸財貨のあるストックをわれわれが所有することに基づく支配される労働は、資本と土地の貢献にたいしてなされなければならない斟酌のゆえに、つねに、それらの諸財貨に体化されている(直接)労働を上回らざるをえない、ということの意味しているのである。要するに、体化された労働と支配される労働とのあいだの均等性ということは、原始的な(物々交換の)経済に妥当するものであって、他のいかなる経済にも妥当するものではない、と思われるということなのである。しかしながらスミスは、この真理を認めることが彼の第二の帰結——すなわち、所得の実質価値は、その所得をえた人がその所得で購買または支配できる(労働単位ではかった)他人の労働の生産物によって確定されなければならない、という帰結——になにか損傷を与えることになるとは考えなかったのである。Skinner[1970], pp. 50-51. 邦訳, 107-108ページ。

- (8) 本稿注5を参照せよ。
- (9) Skinner[1970], p. 51. 邦訳, 108-109ページ。
- (10) Skinner[1970], p. 51. 邦訳, 109ページ。なお、以上でみてきたスキナーの所論は、1979年のスキナーの著書の第7章〔Andrew S. Skinner, *A System of Social Science: Papers Relating to Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press, 1979), chap. 7 (田中敏弘, 橋本比登志, 篠原久, 井上琢智訳[A. S. スキナー アダム・スミスの社会科学体系]〈未来社, 1981年〉, 第7章〈なお、本稿の作成にあたってはこの邦訳も参考にさせていただいた。〉)〕のなかで、若干の部分的修正を伴いつつ、再録されている。
- (11) Skinner[1970], p. 51. 邦訳, 109ページ。
- (12) Skinner[1970], pp. 90-91n. 28. 邦訳, 112-113ページ注28。なお、スキナーは、この注のなかで、以上の問題については、『国富論』第1篇第5章と第11章を結びつけて読むべきこと、および、われわれが本誌第6巻第3号で見たM. ブラウグの見解を参考にすべきことを、指示している。

なお、所得の実質価値をいかなる一時点においてもまた異時点間においても確定しうるような唯一の安定的な基礎としての労働単位にたいするスミスの擁



護という形で示されてきた以上（Ⅱ-6）でみてきたスキナーの見解は、わたくしには必ずしも明らかなものではないのであるが、おそらくそこではスキナーは以下のようなことを言っているのであろう。

A：異時点間の実質所得水準を比較しようとする場合にはある安定的な測定単位を用いることが必要である。スミスの見解では、労働の不効用は通時的に不変であるという意味で、労働単位のみが安定的な測定単位であるのであった。所得の実質価値は、その所得によって購買しうるところの、労働単位ではかった諸財貨の量によって、その所得が労働単位何単位に相当する諸財貨を購買しうるかということによって、結局のところ、その所得が支配することのできる労働単位数によって、確定されるのであり、異時点間の実質所得水準の比較は、それぞれの時点における所得が支配しうる労働単位数の比較によって、なされるのであった。

B：このように、スミスの議論では、所得の実質価値の確定、異時点間の実質所得水準の比較は労働単位を用いてなされることになるのであるが、スミスはさらに、通時的に労働に対する支配力が安定している事物、通時的にある安定的な量でもってある安定的な労働単位数を支配しうる事物を、問題にしている。これは事実上、労働単位1単位当りに支払うべき報酬すなわち個人をして労働に伴う不効用を忍ばせるために（「自分の安楽と幸福とを放棄」させるために）必要な報酬としての賃金単位の問題に関係をもつ。ところで、通時的に労働に対する支配力が安定している事物、通時的にある安定的な量でもってある安定的な労働単位数を支配しうる事物ということとは、通時的にある安定的な量でもって労働単位1単位を支配する事物ということとなり、この意味で、その事物は、通時的に不変な不効用を伴う労働1単位を支配するのに必要な報酬としての賃金単位の大きさそのものを通時的に安定的なものにする事物ということになる。したがってまた、この事物の量で示された所得の通時的な増減は、この事物の量で示された所得をこの事物の量でその大きさが示される安定的な大きさの賃金単位で割ることによって算出される労働単位数つまり労働単位数で示された所得の大きさ・所得の支配しうる労働単位数・所得の実質価値の大きさ・所得の実質水準の通時的な向上、低下を、安定的に、比例関係を保ちつつ、反映することとなる。なお、スミスは、以上のようなことを可能にさせる事物の候補として貨幣と賃金財（穀物）をとりあげるのであるが、彼によれば、短期については貨幣が、長期については賃金財（穀物）が適している、とされるのであった。そしてそこでのスミスの論理はつぎのようなものであった。

〔B：短期：賃金財（穀物）〕：スミスによれば、短期（数年間）では、労働者の実質賃金は経済成長率とともに変化しがちである、とされるのであった。それゆえ、等量の賃金財（穀物）は安定的な労働単位数を支配することができ

ず、等しい労働単位数が安定的な量の賃金財(穀物)によって支配されない。このような場合には、通時的に不変な不効用を伴うものとしての労働の1単位を支配する賃金財(穀物)の量、この意味での賃金財(穀物)の量で示された賃金単位の大きさは、通時的には不安定なものとなる。したがってまたこのような場合には、賃金財(穀物)の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、そのまま、支配しうる労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下と安定的な比例関係を保たない、ということとなる。

〔B：短期：貨幣〕：それにたいし、スミスによれば、短期では、貨幣の価値は安定的、つまり、等量の貨幣は安定的な労働単位数を支配しうるのであり、等しい労働単位数が安定的な量の貨幣によって支配されるのであった。このような場合には、1労働単位を支配する貨幣の量、この意味での貨幣タームで表された賃金単位は、通時的に安定的な大きさのものとなる。したがってまたこのような場合には、貨幣の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、安定的な比例関係を保ちつつ、労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下を反映することとなる。〔ただし、短期では賃金の諸財貨に対する購買力という意味での実質賃金に変化しがちであるとすれば、短期においては貨幣タームでの所得の通時的な増減は労働単位タームでの所得の通時的な増減と安定的な比例関係をとるとしても、後者の意味での所得の通時的な増減と所得で購買しうる諸財貨の量の通時的な増減とは、安定的な比例関係をとらないことになる。〕

〔B：長期：賃金財(穀物)〕：他方、スミスによれば、長期では賃金は生存費水準に向かう傾向がある、とされるのであった。それゆえ、等量の賃金財(穀物)は安定的な労働単位数を支配することができ、等しい労働単位数が安定的な量の賃金財(穀物)によって支配される。このような場合には、1労働単位を支配する賃金財(穀物)の量、この意味での賃金財(穀物)タームで表された賃金単位は、通時的に安定的な大きさのものとなる。したがってまたこのような場合には、賃金財(穀物)の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、安定的な比例関係を保ちつつ、労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下を反映することとなる。

〔B：長期：貨幣〕：それにたいし、スミスによれば、長期では貨幣はその本位貨の貶質によってであれアメリカの鉱山の発見のような諸発見の結果によってであれその価値が変化しやすい、つまり、等量の貨幣は安定的な労働単位数を支配することができず、等しい労働単位数が安定的な量の貨幣によって支配されないのであった。このような場合には、通時的に不変な不効用を伴うものとしての労働の1単位を支配する貨幣の量、この意味での貨幣タームで表さ

れた賃金単位の大きさは、通時的に不安定なものとなる。したがってまたこのような場合には、貨幣の量で示された所得のこの期間をつうじての増減は、そのまま、支配しうる労働単位数で示されるものとしての所得の実質水準のこの期間をつうじての向上、低下と安定的な比例関係を保ちはしない、ということとなる。〔なお、長期においてはうえでみた意味での実質賃金が安定的であるとすれば、長期では、貨幣タームでの所得の通時的な増減はそのまま労働単位タームでの所得の通時的な増減と安定的な比例関係をとらないとしても、労働単位タームでの所得の通時的な増減と所得で購買しうる諸財貨の量の通時的な増減とは、安定的な比例関係をとることとなる。〕

以上のような意味で、スミスの議論では、貨幣タームで表された賃金単位は短期では適当と考えられ、長期では賃金財（穀物）タームで表された賃金単位が適当と考えられており、そして、貨幣単位、穀物単位の有用性は否定されてはいないのである。スミスは、そのようなものを用いることによってその量が算出されることになる労働単位こそが比較の基礎となりうる唯一の普遍的で不変な標準スタンダードであると考えているのであり、そしてその理由は、労働はこうむる不効用ということからみてつねに安定的なものである、ということであったのである。

C：このようにスミスの議論では、労働の不効用は通時的に不変であると考えられており、そしてそのことが労働単位を唯一の普遍的で不変な標準スタンダードとすることの根拠となっているのであるが、スミスはまた、さまざまな労働にはさまざまな程度の不効用が伴うということに気づいていた。すなわち、スミスは、さまざまな労働は、その各々の労働は通時的に不変な不効用を伴うのではあるが、それらの労働は互いに異なった程度の不効用を伴うと考えていたのである。そして、このような労働に伴われる不効用の相違ということを認めたくえでなお労働単位を標準スタンダードとするためには異なった程度の不効用を伴う労働の単位数をある標準的な労働の単位数に換算することが必要になるのであるが、この問題にたいしてスミスは、伴われる労働の不効用の相違は市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差に反映されるのであり、この貨幣賃金格差の割合にしたがってさまざまな程度の不効用を伴う労働の単位数を、普通労働の単位数で表現することができる、と考えたのである。

なお、スキナーが参考にするよう指示し、またわれわれが本誌第6巻第3号でみたブラウグの見解においては、スミスは、労働の不効用は異場所間、異時点間において不変であるとし、また、(諸財貨に対する購買力という意味での)実質賃金率は通時的に不変でしかもその実質賃金率は不変の労働不効用を表すということを暗黙裡に仮定していたのであり、そして、スミスは事実上、「市場のかけひきや交渉」、市場での競争をつうじて、異質労働の問題を克服しつ

つ成立する1時間の普通労働に伴う（不変の）不効用を反映する1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率としての代表的な賃金単位を設定できたはずであり、スミスの議論での実質所得の測定、その異時点間の比較は、その時々の貨幣タームでの所得がその時々市場において成立している代表的な賃金単位のどれだけに相当するか、その時々所得がどれだけの量の普通労働を支配しうるかということを確認することによってなされる、ということになるのであった。なお、たしかにブラウグは、スミスの議論においては長期では穀物価格は安定的あり、しかも穀物は「人々の基本的な生活資料」であるから穀物の貨幣価格は長期では貨幣賃金を支配し、長期では、穀物タームでの賃金単位は時間をつうじて不変的であり、そして労働の不変的な不効用を反映するということになる、とみていた。しかし、ブラウグの理解においては、スミスの議論での実質所得の測定、その異時点間の比較は、うえてみたように、その時々の貨幣タームでの所得をその時々市場において成立している（貨幣タームでの）代表的な賃金単位〔したがって、ここでは、この賃金単位そのものの大きさ自体は、必ずしも、通時的に安定的なものであるわけでも、またそうである必要もない、ということとなる〕で割ることによってなされることなのであったのであり、ブラウグはどちらかといえば、スミスが銀や穀物を問題にしたのはうえてみた意味での賃金単位そのものの大きさを表すための物差し、異時点間の賃金単位の大きさを比べるための物差しとして銀の単位数をとるか穀物の単位数をとるかといった観点からであったのであり、そしてスミスは価格の安定性ということから短期については前者を、長期については後者をとった、とみているように思えるのであった。また、うえてふれたように、ブラウグの見解ではスミスは（諸財貨に対する購買力という意味での）実質賃金率が通時的に不変であると暗黙裡に仮定していたのであった。したがってここでは、うえてみた意味での賃金単位を用いて確定される所得の通時的な増減は、所得の購買しうる諸財貨の量の通時的な増減と安定的な比例関係を保つ、ということになる。

### A. S. スキナー（1970）についての覚書

スキナーは、『国富論』におけるスミスの価値・価格分析に言及するさいその議論を、第1篇第5、第6章に主要な部分が示されているものとしての価値理論に関する議論と、第6、第7章に主要な部分が示されているものとしての価格とその決定因に関する議論からなるものとして把握し、さらに、前者の議論は、諸財貨間の交換比率を決定する諸力に関する問題

と、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との諸財貨の交換において使用される手段ということに関係する問題とを、取り扱い、しかも、これらの異なるものではあるが関連のある二つの問題が取り扱われるさいに「交換価値」(‘exchangeable value’) というただ一個の用語が用いられており、そしてこのことがスミスの議論を幾分あいまいにしている大きな理由である、とするのであった。

そして、スキナーによれば、個人によって生産された諸財貨の総ストックの価値を測定し他人との諸財貨の交換において使用される手段ということに関係する問題を取り扱うさいスミスは、そのような諸財貨の総ストックの実質価値はそれが支配することができまたそれと交換に受け取られる、労働単位のタームで示された諸財貨の量によって測定されなければならないとして、つぎのような議論を展開した、とされるのであった。すなわち、スミスは、個人はただ一種類の生産物を生産するとともに労働が唯一の生産要素であって労働の生産物がすべてその労働の行使者に属しそして諸財貨の交換比率がそれらの諸財貨に体化された労働の割合に等しくなる原始的な物々交換経済といった分析上の装置を用いて、そのような経済では体化された労働はそれと等しい量の労働を支配するというを示し、そしてそのような議論の助けを受けつつ、個人が自分の生産物を他人の生産物と交換することによって自分の必要を満たすことのできるその程度はその個人が交換において受け取る、労働単位ではかった他人の産出の量〔結局、支配しうる労働量〕によって確定されるべきであるといった事実上諸個人の経済的厚生を測定するための一方法を、提案し、しかもスミスは、体化された労働量が支配しうる労働量と等しくなるのはうえのような物々交換経済においてのみであるがこのような測定方法は近代の経済にもあてはまる普遍的な妥当性をもつものと考えた、そしてスミスはさらにこのような論拠に基づいて、支配しうる労働量によって確定されるものとしての所得の実質価値（実質所得）を、貨幣タームで評価されるものとしての所得の名目価値（貨幣所得）から区別するのであった、というのである。

なお、スキナーによれば、スミスはすべての時点における所得の実質価値の確定を可能にするとともに異時点間の実質所得水準の比較を可能にする唯一の普遍的で不変な標準<sup>スタンダード</sup>として事実上、労働単位を主張したのであるが、スミスがそのようにしたこと理由は、労働の不効用は通時的に不変であるということであったのであり、そこでの労働単位は不効用の観点から述べられているものであって、直接的に人・時（man-hours、延べ労働時間）の観点から述べられているものではない、とされるのであった。

他方スキナーは事実上、スミスの議論からすれば、短期については、貨幣の労働購買力の短期における安定性のゆえに、1労働単位を支配する貨幣の量、この意味での、1労働単位を支配するのに必要な報酬としての貨幣タームで表された賃金単位は通時的に安定的な大きさのものとなり、貨幣の量で示された所得の増減は、その貨幣タームでの所得を貨幣タームでの賃金単位で割ることによって算出される「支配しうる労働単位数」で示された所得の増減（所得の実質水準の向上、低下）を安定的な比例関係を保ちつつ反映するということとなり、また、長期については、賃金財（穀物）の労働購買力の長期における安定性のゆえに、1労働単位を支配する賃金財（穀物）の量、この意味での、1労働単位を支配するのに必要な報酬としての賃金財（穀物）タームで表された賃金単位は通時的に安定的な大きさのものとなり、賃金財（穀物）の量で示された所得の増減は、その賃金財（穀物）タームでの所得を賃金財（穀物）タームでの賃金単位で割ることによって算出される支配しうる労働単位数で示された所得の増減を安定的な比例関係を保ちつつ反映するということになるのであり、この意味でスミスの議論では事実上、短期では貨幣タームで表された賃金単位、長期では賃金財（穀物）タームで表された賃金単位が適当と考えられるとともに、貨幣単位、穀物単位の有用性は否定されているわけではないのである、とみているように思えるのであった。〔なお、スキナーは、スミスの議論では短期においては実質賃金は変化しがちであるのにたいし長期においては賃金は生存費水準に向かう傾向がある（長期的には実質賃金

は安定的である）とされている、とするのであった。したがって、ここでの実質賃金の大きさは賃金の諸財貨に対する購買力の大きさと解することができる。ところで、もしこの実質賃金の異時点間における変化によって1労働単位に支払われる賃金の諸財貨に対する購買力が異時点間において変化するならば、逆にいえば、異時点間において諸財貨の等量が等しい労働単位数を支配しえないならば、所得によって購買しうる諸財貨の量そのものの増減と、その所得によって購買しうる労働単位のタームで示された諸財貨の量——その所得の支配しうる労働単位数——の増減とは、安定的な比例関係をとらないことになり、うえて理解されたようなものとしてのスミスの議論からすれば短期についてはこういうことが生じがちということになるのであるが、スキナーはこの問題にはとくに言及してはいないのであった。]

また、スキナーは、スミスが市場の「かけひきや交渉」ということに言及したのは、さまざまな労働に伴われる不効用の相違ということを克服して異なった程度の不効用を伴う労働の単位数を普通労働の単位数に還元するという問題に関してであったのであり、そしてスミスはその還元は市場の「かけひきや交渉」によって確立される貨幣賃金格差によって示される割合にしたがってなされうると考えた、とみるのであった。